## 佐久の先人たち㊲

### 江戸時代中期の俳人・歴史家

# 瀬下敬忠

（1709～1789年）

東信濃に蕉風の俳壇を広め、俳文の世界でも横井也有に肩をならべるような、豊かな知識と趣きをみせた。また、『千曲之真砂』などの歴史・地誌研究にも大きな業績をあげた。

## ●幅広い教養

瀬下敬忠は、佐久郡三塚村（現佐久市三塚）から、江戸元禄年間に野沢村（現佐久市野沢）へ別家した敬豊の子として、一七〇九（宝永6）年に生まれた。父敬豊は、幕府陣屋の手代、岩村田藩の御用達をつとめ、書画・俳諧をたしなみ、弓・槍術などもすぐれていた。「閑鷗」の俳号で江戸から句集を出し、漢詩や和歌作りなどの風雅も楽しんだ。

父の隠居後敬忠は、岩村田藩御用達役や野沢村年寄役をつとめ、藩の公務や村内外の紛争・公事（訴訟）などにかかわり、藩御用金の差し出し、野沢橋架けかえの争い、助郷諸伝馬役の割りふり、脇街道を通る参勤交代の本陣代役（人馬の移動・宿泊・接待）などで大わらわだった。

幼いころから父の影響を強くうけた敬忠は、父を訪ねる文人墨客や遊芸人にも接し、広い教養や芸能を身につけていった。和歌・俳諧や琴棋書画に親しみ、篆刻もおこない、謡・鼓・三味線をたしなみ、蹴鞠や賭弓（賭け弓）に熱中している。とりわけすぐれた業績をあげたのは歴史・地誌研究である。多芸多才な文人・歴史家だったといえよう。

## ●俳諧・俳文の独自な世界

近年有志が貞祥寺に敬忠の句碑を建てたときの調査で、著作は七〇種以上と推測された。筆まめで手書きの稿本を多く残したが、印刷した板本が少ないのは、後半生の家産窮迫による資金難のためとみられる。その点『瀬下玉芝俳文集　鶴巣反古枕』は、翻刻・校訂もたしかで貴重な刊本である（玉芝は俳号）。

貞祥寺境内の句碑、「花もなき柳や風の吹次第」と刻まれている

俳文『本覚円公終焉記』で、近くの本覚庵（寺）の徳田海円和尚から漢籍を教わり、俳句の手ほどきもうけたことがわかる。海円に捧げた「薬煮る炭も涙に氷りけり」の追悼句は「祖翁」と敬慕した松尾芭蕉の『幻住庵記』に似ているといわれる。父閑鷗ゆずりの江戸立羽不角派の、雑多な形式と内容からなる遊戯的な俳諧である雑俳から脱け出て、蕉風復古と呼ばれる芭蕉の俳風の見直しをめざす江戸俳壇の流れに向かうのは一七三九（元文4）年ころからだった。

芭蕉の風雅の復興を目指す「五色墨派」の一人松木珪琳に入門したのがこの年、翌年に岩村田町（現佐久市岩村田）の有力俳友吉沢鶏山（好謙）をさそって入門させ、二人は交遊を深めようと俳諧集『ひなことば』を板行（印刷刊行）した。敬忠の姻戚の

稿本『鶴巣反古枕』の表紙
（瀬下敬忠の自筆・装幀）



大口屋空翠、服部黄鶴（敬忠の兄良之、空翠の妹へ入婿）も連句を寄せている。以後、佐久地方の俳壇は蕉風色を濃くしていく。

『鶴巣反古枕』の蹴鞠に夢中な俳文にはおどろく。「七夕の風やうらみの葛袴」と詠んで、七夕の昇級鞠会に敬忠は葛袴を着けて熱中していたのがわかる。蹴鞠がチームプレーだったため、蹴鞠仲間と俳諧連衆とは重なり合っていた。また、『源氏物語』『枕草子』『徒然草』などを自在に引いた猫談義は、いつの世もかわらぬ猫好きの存在をうかがうことができる。

かつて井出一太郎も指摘したとおり、敬忠の俳文は尾張国の俳人横井也有の『鶉衣』をふまえていたのは明らかである。板行前から写本や稿本を読んでいたらしく、敬仰しながらライバル意識もあったようだ。好んで愛玩した大津絵への思い入れなどは也有に勝っており、「大津絵や花はかはれど雪の色」の賛句がある。

## ●『千曲之真砂』と歴史家の一端

代表的な歴史書『千曲之真砂』は、信濃国全域の歴史・地誌研究で、『新編信濃史料叢書』のものでも三〇〇ページにおよぶ。それは一七六四（宝暦14）年に一〇巻に編成したものを底本とする。佐久郡の古城について考証したなかから「野沢城」の項をとりあげ、歴史家敬忠のごく一端をかいま見ておこう。

多く筆をさいているのは城主の伴野氏、一遍上人とその開基と伝える金台寺である。とくに詳しいのが、一七五七（宝暦7）年に、同寺が時宗の本山遊行寺（神奈川県藤沢市）から寄進された『遊行上人縁起絵』（第二巻、国重要文化財）についての記述である。この寺は敬忠の住家から東へ二百メートルほど、当時の住職は親しい蹴鞠仲間の一人で、寺庭には鞠場までつくってあった。

敬忠が記す「信濃国佐久郡伴野といふ所にて、歳末の別時紫雲はじめて立侍りける」以下の文章は、有名な縁起絵の詞書とぴったり一致する。さっそく住職から絵巻物の原本を見せてもらったにちがいない。詞書の筆者、絵の描き方、巻物の表装、巻軸の材質、料紙の古さや質までこまかく書きとめている。歴史家敬忠の面目躍如といった感がある。

敬忠自伝の『こよみぐさ』で、翌一七五八年に、第五二代遊行上人一海が金台寺へ滞在したこと（縁起絵へのお礼招待か）がわかる。さきの絵巻物のこまかい仕様は一海上人からも聞きとったかと思われる。ついでに推測をふくらませれば、そのとき敬忠は、金台寺住職ともども上人一行をまじえて、跡部村（現佐久市跡部）の踊り念仏を実見していたかもしれない。

敬忠が生きていたのは二百年以上も前のこと、その時代や生活をうかがう手がかりはあるだろうか。屋敷のなかに鞠を蹴る鞠場や、弓を射る的場まで設けたという大きな家はどこにあったのか。郷土史家の市川武治は、野沢十二町（現佐久市野沢）の柳田呉服店（現株式会社やなぎだ）本社北、旧大草商店跡地で、いまは駐車場になっているあたりだったかと推定している。

瀬下敬忠碑、右は表面、左は裏面
（現在佐久市三塚の瀬下弥生氏宅へ移転）

（伴野敬一）

○参考文献
『瀬下玉芝俳文集　鶴巣反古枕』古今書院　一九三七
『新編信濃史料叢書　第九巻』信濃史料刊行会　一九七三
『瀬下敬忠』瀬下敬忠句碑建設会　一九七九
伴野敬一連載「俳文集『鶴巣反古枕』を読む」
（『佐久』第68号～第71号　二〇一三～一五）